

『五千円札』

埼玉県さいたま市 あんのくるみ

初めてのバイト代で、父を食事に連れて行こうと思っていた。

しかし当日、些細なことで父と喧嘩した私は、そのお金で欲しかった服や漫画をたくさん買った。そして父と行くうと思っていたレストランが閉まる頃、家に帰った。

軽くなった財布には五千円札が一枚だけ残っていた。お札の端が小指の爪ほど破れていて、その横に赤いインクのシミが付いている。まるで傷口から血が出ているようで、見ていると私の心まで、ズキズキと痛みだした。

やっと手に入れた服も漫画も、買い物袋から出す気にならない。私は付箋に「タバコでも買って」と書くと、それを五千円札に貼った。それから寝ている父の枕元に、傷のある五千円札を置いた。

四年後、父が病気で他界した。

私は遺品の中に、あの五千円札を見つけた。

それは小さな古い木箱の中にあった。

端が小指の爪ほど破れていて、赤いインクのシミがある五千円札。紛れもなくあの日、私が父の枕元に置いた五千円札だ。

「なんでこんなところに・・・」

そうつぶやくと、

「きつと、間違っって使わないようにしてたのね」

と叔母が言った。いつも小遣いが少ないとぼやいていたのに、タバコも買わず仕舞い込んでいるなんて。私は寡黙な父のやさしさに声を上げて泣いた。

あれから十年経つが、私は今でもその五千円札を大事に持っている。父が遺した小さな小箱に入れて仕事場に置いている。

傷のある五千円札は、今では私の心のお守りだ。